

# 平安和文会話文における準体句 — 助詞「に」後接の場合 —

土岐 留美江

日本語教育講座

## Quasi-nominal Phrases in Heian Japanese Conversational Texts — Cases with Postpositional Particle “ni” —

Rumie TOKI

*Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### Abstract

This paper examines lexical-semantic properties of verbs, adjectives and auxiliaries appearing in quasi-nominal phrases (quasi-nominal construction with adnominal verbal ending) which are accompanied by postpositional particle “ni” in comparison with those without postpositional particle, those with postpositional particle “wo” and other attributive constructions such as adnominal clauses or final-attributives (sentences ending in adnominal form) in colloquial Heian Japanese.

The specific findings are as follows:

- (a) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “ni”, verbs of emotion/thought/perception, verbs of motion/change, verbs of existence are most frequent, in descending order.
- (b) In quasi-nominal phrases, all adjectives types (emotional, attributive and intermediate) appear.
- (c) In quasi-nominal phrases with auxiliary verb, conjecture auxiliary “mu” is most frequent.

It is revealed that there are some usage differences between quasi-nominal phrases with postpositional particle “wo” and those with postpositional particle “ni.” In order to clarify the relationship between quasi-nominal phrases and final-attributives in the syntax of adnominal-ending forms, it is necessary to examine their uses more extensively, including those accompanied by other postpositional particles.

### 1. はじめに

古代日本語における活用語の連体形には、

- ①連体修飾節を形成する連体用法
- ②そこで文を終止する連体形終止法
- ③名詞を伴わずに連体形だけで名詞句相当の働きをする準体用法

の三つの用法がある。

①は現代日本語にも見られる通常の連体節形成機能であるが、②と③は古代語特有の用法である。

②の連体形終止法については、通常の終止形終止との表現性の差異や文体的特徴、または構文的要因などについて、山内（2003）を代表とする多くの先行研究がある。

また、③の準体用法については、断定の助動詞の活

用語承接の衰退について連体形準体法の消滅と関連づけて論じた信太（1970）や、準体法の消滅過程について連体形や連体形終止との関連で考察した同（1987）、準体助詞「の」の成立との関連を論じた同（2006）、現代語の「の」節「こと」節との関係で、中古語準体句の特徴について述べた近藤（2001）などがある。

古代日本語に見られる連体形の用法の広範囲な広がり、古代語の大きな特徴の一つであり、なぜ、①連体修飾節形成、②文終止、③名詞句形成、という相互にまったく異なると思われる文法機能が、連体形という同一の文法形式により担われるのかという問題が存在する。

これらの用法の相互の関係については、連体形終止を「準体句の直接表出（山内（2003）p.141）」と見る解釈がなされており、尾上（1982）などでも同様の立

場から連体形終止法の表現性のメカニズムが詳細に分析されている。また、信太知子氏の一連の研究においては、連体形による各用法がしばしば相互に関連づけられて論じられており、特に信太(1996)では、推量辞の出現に着目しつつ、連体句、準体句、接続句、終止形上接句、連体形終止文、係り結び文の六類の句について、連体形による句としての総括的な比較対照が試みられている。

しかし、連体形の各用法の特徴を、データに基づき数量的に比較分析した研究は、いまだ十分になされているとは言い難い。

土岐(2005)では、連体形終止法を終止形終止法やゾ、ナム共起の係り結びと比較し、連体形終止をとる場合に現れる連体形は、他の場合と比較して、動詞、形容詞、助動詞の各品詞別に語の頻出度に特徴があることを明らかにした。また、土岐(2008)では、同様の調査を連体節連体形について行い、結果を連体形終止の場合と比較した。その結果、連体節連体形と連体形終止連体形とでは、各品詞別に頻出する語の傾向に異なる様相が見られることを明らかにした。

残る分析対象である準体句のうち、助詞が後接しないケースについては土岐(2009)、助詞「が」が後接するケースについては土岐(2010)、助詞「を」が後接するケースについては土岐(2011)で考察を行った。本稿では、助詞「に」が後接する準体句について分析を行う。

## 2. 調査対象資料

本稿で分析対象とした資料および使用テキストは以下の通りである。本稿で引用した土岐(2007)の連体法のデータも同様の資料に拠っている。

『源氏物語』岩波新日本古典大系本

一方、土岐(2005)で連体形終止法および終止形終止法の分析対象とした資料および使用テキストは以下のものであり、源氏のみを使用した準体法および連体法の場合とは調査範囲が異なっている。

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語』：宇津保物語はおうふう「うつほ物語全」、大和物語は岩波旧日本古典大系本、その他は岩波新日本古典大系本による。

また、諸本の校異で当該の形態に異同があるものはすべて対象から除外した。

## 3. 分析対象形式

土岐(2005)で考察した連体形終止については、地の文と会話文とで大きく用法が異なることが先行研究により指摘されているため、会話文中のデータに限定して考察を行った。これらとの比較上、連体法を分析した土岐(2008)や、助詞無し準体法および「が」「を」後接の準体法を分析した土岐(2009)、土岐(2010)、

土岐(2011)でも、同様に会話文中のデータに限定して分析を行った。そこで、本稿で扱う「に」準体法の用例も、以下、会話文中のデータに限定して考察を進めていく。

また、「～給ふ」、「～侍り」、「(ラ)ル」、「(サ)ス」などの待遇表現の補助動詞、助動詞が後接している場合は分析対象に含めている。このような待遇表現の接辞が入る場合と入らない場合とで、何らかの相違があるか否かという点については、今後、吟味していく必要があると考えている。

## 4. 分析

### 4.1. 助動詞を含まない動詞準体句

助詞「に」が後接するケースには、格助詞相当のものと接続助詞相当のものとが含まれる点で、助詞「を」が後接するケースと類似している。格助詞と認定するか接続助詞と認定するかは、信太(1987)で指摘されているように判別に困難が伴う場合が多い。信太(1987)では、格関係が少しでも認められれば連体句と認めるという立場をとっており、本稿でも同様に、少しでも格関係が認められるものは準体句として扱うことにする。

格助詞と認定された「に」準体法の用例を、終止形・連体形異形の活用語と、形態からは活用形の判別がつかない終止形・連体形同形の活用語とに分けて、動詞の意味タイプ別に分類したのが、次の表1およびグラフ1である。また、参考として、接続助詞と認定され

表1 「に」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	20 (40)	11 (31)	31 (36)
存在	1 (2)	6 (17)	7 (8)
感情・思考・知覚	29 (59)	19 (53)	48 (56)
計	50 (101)	36 (101)	86 (100)

グラフ1 「に」準体法 動詞意味タイプ別分布

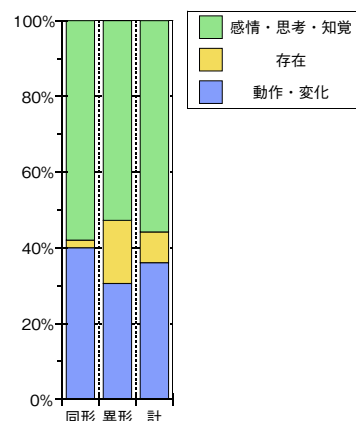
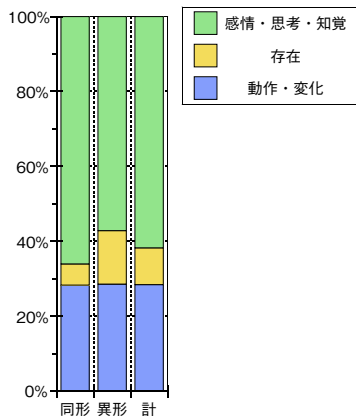


表1' 接続助詞「に」 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体同形	終止・連体異形	計
動作・変化	15 (28)	14 (29)	29 (28)
存在	3 (6)	7 (14)	10 (10)
感情・思考・知覚	35 (66)	28 (57)	63 (62)
計	53 (100)	49 (100)	102 (100)

グラフ1' 接続助詞「に」 動詞意味タイプ別分布



た「に」が考察するケースについても同様に分類し、表1' およびグラフ1' に示す。

なお、「に」には終助詞と認定されるものもあるが、今回の調査対象資料中、終助詞として扱わなければ説明が出来ない例は見受けられなかった。

格助詞「に」と接続助詞「に」で分布傾向に際立った相違は認められない点で、土岐（2011）で分析した助詞「を」の場合と類似の傾向を示している。また、格助詞「に」の場合と比較して接続助詞「に」の場合は感情・思考・知覚動詞の比率が若干増加し、その分、動作・変化動詞の比率が低い点も助詞「を」の場合と同様である。ともに一番比率が高いのが感情・思考・知覚動詞であり、次が動作・変化動詞、一番比率が低いのが存在詞となっている。この点で基本的には連体形終止の場合の分布傾向に類似しているのであるが、助詞「を」の場合と比較しても、更に感情・思考・知覚動詞の比率が高く、より連体形終止の場合の分布傾向に酷似していると言える。

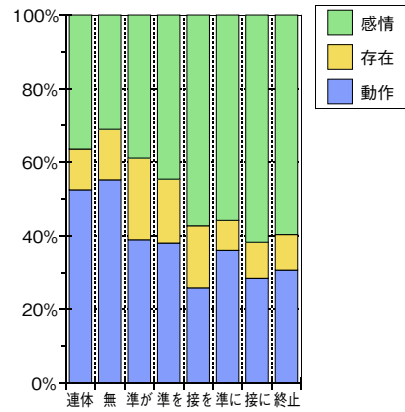
以下の表2とグラフ2に、同形活用語と異形活用語の合計の数値を用いて、連体法、助詞無し準体法、「が」準体法、「を」準体法、接続助詞「を」、「に」準体法、接続助詞「に」、連体形終止法の分布を比較して示す。

最左端が連体法であり、次の無助詞準体法から、「が」準体法、「を」準体法、「に」準体法、接続助詞「を」、接続助詞「に」と、感情・思考・知覚動詞の比率が高まっていき、ほぼそれに反比例するように動

表2 連体形用法別 動詞意味タイプ別分布一覧

	連体	準無	準が	準を	接を	準に	接に	終止
動作・変化	731	16	7	45	23	31	29	19
存在	155	4	4	21	15	7	10	6
感情思考知覚	508	9	7	53	51	48	63	37
計	1394	29	18	119	89	86	102	62

グラフ2 連体形用法別 動詞意味タイプ別分布一覧



※凡例の感情は感情・思考・知覚動詞、存在は存在詞、動作は動作・変化動詞を表す。

作・変化動詞の比率が下がっている。接続助詞「に」に至っては、連体形終止法よりも感情・思考・知覚動詞の比率が若干上回り、連動して動作・変化動詞の比率も連体形終止法より若干低くなるという興味深い結果となっている。

準体法の分布は無助詞から接続助詞「に」へと相互に連続性を有しながら動作・変化動詞から、感情・思考・知覚動詞へと比重がシフトしていく。

無助詞は最左端の連体法より動作・変化動詞率が高く（すなわち感情・思考・知覚動詞率が低く）、「に」接続助詞は最右端の連体形終止より動作・変化動詞率が低い（すなわち感情・思考・知覚動詞率が高い）。

総じて、接続助詞の用法を持つ「を」と「に」は、ともに句末終止として現れる性質を持つため、連体形終止分と非常に近似した分布傾向を示していると言える。

以下に「に」準体法の動詞意味タイプ別全例を挙げる。

#### 4.1.1 動作・変化動詞

##### 【同形】

- (母君)いままでとまり侍るがいとうきを、かかる御使の蓬生の露分入り給ふにつけてもいとはずかうなん (1,11,8)
- (源氏) 常に思ひ給へ立ちながら、かひなきさまにのみもてなさせ給ふにつゝまれ侍りてなむ (1,180,5)
- (左大臣) 齢のつもるには、さしもあるまじきこと

- につけてだに、涙もろなるわざに侍を (1,323,14)
- 4) (源氏)世の静かなからぬことは、かならずまつりごとのなをくゆがめるにもより侍らず (2,236,13)
- 5) (源氏)文のざへをまねぶにも、琴ふゑの調べにも、音たえずをよばぬ所の多くなむ侍ける (2,281,12)
- 6) (中宮)かうこと―しうとりなさせたまふになん、中―心をかれぬべく (3,159,8)
- 7) (柏木)色―に深く思い給へまさるにせきかねて、かくおほけなきさまを御覽ぜられぬるも (3,363,11)
- 8) (源氏)女官なども、公事を仕うまつるにたづきなく (3,67,3)
- 9) (玉鬘)女御なん、つれ―にのどかになりたるありさまもおなじ心に後見て、慰めまほしきを、など、かのすゝめ給につけて、いかゞなどだに思ひ給へよるになん (4,258,3)
- 10) (大納言)心ゆくにまかせて、かしづきて見たてまつらんに、命延びぬべき宮の御さまなり (4,234,9)
- 11) (少将)もてあがめて後見だつに、罪隠してなむあるたぐひもあめるを (5,129,4)
- 12) (仲人)手に捧げたるごと思ひあつかひ後見たてまつるにかゝりてなむ、さるふるまひし給人々ものし給めるを (5,130,15)
- 13) (仲人による少将の言)いはけなく年足らぬほどにおはすとも、真実のやむごとなく思ひおきて給へらんをこそ本意かなふにはせめ (5,132,13)
- 14) (母君)後は知らねど、たゞいまはかくおほし離れぬさまにの給につけても、たゞ御しるべをなむ思ひ出できこゆる (5,234,9)
- 15) (使者)まだ鳥の鳴くになむ、出し立てさせ給へる (5,264,4)
- 16) (侍従)おほしもあへぬさまにて亡せ給にたれば、いみじと言ふにも飽かず、夢のようにて (5,267,6)
- 17) (右近)たまさかにもかく渡りおはしますを、待ちきこえさせ給に、もとよりの御身の嘆きをさへ慰め給つゝ (5,287,1)
- 18) (僧都の文)けさ、ここに大将殿のものし給て、御ありさま尋ね問ひ給ふに、はじめよりありしやうくはしく聞こえ侍りぬ (5,402,1)
- 19) (小君)おほし隔てて、おほ―しくもてなせ給ふには、何ごとをか聞こえ侍らん (5,405,1)

## 【異形】

- 20) (源氏)もよをしばかりの言を添ふるになし侍らむ (2,126,3)
- 21) (右近)見たてまつり並ぶるに、かの後の宮をば知りきこえず、姫宮はきよらにおはしませど、まだかたなりにて、生ひ先ぞをしはかられ給 (2,352,7)
- 22) (内大臣)いまかくすこし人数にもなりはべるにつけて (3,72,15)

- 23) (源氏)かゝるほどのらうがはしき心ちするにより、えまいり来ぬを (4,13,8)
- 24) (大和守)心ほそくかなしき御ありさまを見たてまつり嘆き、このほどの宮仕へは耐ふるに従ひて仕うまつりぬ (4,136,13)
- 25) (玉鬘)いまはかく、世に経る数にもあらぬやうになりゆくありさまを、おほし数まふるになむ、過ぎにし御事もいとゞ忘れがたく思たまへられける (4,257,7)
- 26) (中君)宿をば離れじと思心深く侍を、近くなどのたまはするにつけても、よろづに乱れ侍りて (5,12,4)
- 27) (中将)来し方の忘れがたくて、かやうにまいり来るに、又今ひとつ心ざしを添へてこそ (5,375,13)
- 28) (薫)身のをきても心にかなひがたくなどして、思ひながら過ぎ侍るには、又え避らぬことも数のみ添いつゝは過ぐせど、5,398,2
- 29) (浮舟)この童の顔は、ちいさくて見し心ちするにも、いと忍びがたけれど (5,404,1)
- 30) (薫)こゝに時々ものするにつけても、かいなきことのやすからずおほゆるがいと益なきを (5,87,7)

## 4.1.2 存在動詞

## 【同形】

- 31) (惟光)とかくの事、いとたうとき老僧のあひ知りて侍に、言い語らひつけ侍りぬる (1,131,8)

## 【異形】

- 32) (太后)致仕のおとゞも、又なくかしづくひとつむすめを、このかみの坊にておはするにはたてまつらで (1,390,4)
- 33) (僧都)仏天の告あるによりて奏し侍なり (2,234,8)
- 34) (物の怪)など、宮より召しあるにはまいり給はぬ (2,45,14)
- 35) (故桐壺院の霊)内裏に奏すべきことのあるによりなむ、急ぎのほりぬる (2,57,2)
- 36) (薫)何ごとにもあるに従ひて、とあるもかゝるものめに見なし (4,368,5)
- 37) (薫)何ごとにもあるに従ひて、とあるもかゝるものめに見なし、すこし心に違ふふしあるにも、いかゞはせむ、さるべきぞ、なども思なすべかめれば (4,368,7)

## 4.1.3 感情・思考・知覚動詞

## 【同形】

- 38) (惟光)とかくの事、いとたうとき老僧のあひ知りて侍に、言い語らひつけ侍りぬる (1,131,8)
- 39) (左馬頭)おほかたの世につけて見るには咎なきも、わがものとうち頼むべきを選らんに、多かる中にもえなん思ひ定むまじかりける (1,38,9)

- 40) (左馬頭) いま思には、いと軽<sup>へ</sup>しくことさら  
びたる事也 (1,42,2)
- 41) (末摘花) 親の御影とまりたる心ちする古き住み  
かと思ふに慰みてこそあれ (2,134,7)
- 42) (藤壺) はづかしう苦しき目を見るにつけても、  
(2,271,10)
- 43) (右近) またさるたぐひおはしなむやとなむ  
思侍に、いづくか劣り給はむ (2,352,12)
- 44) (源氏) 年ごろ御行く糸を知らで、心にかけぬ隙  
なく嘆き侍を、かうて見たてまつるにつけても、  
夢の心ちして (2,364,9)
- 45) (源氏) 見奉るにも心やすく、本意かなひぬるを  
(2,382,9)
- 46) (故桐壺院の霊) いみじき愁へに沈むを見るに、  
耐へがたくて (2,57,1)
- 47) (源氏) たゞ行ななき空の月日の光ばかりを、故郷  
の友とながめ侍に、うれしき釣舟をなむ (2,59,15)
- 48) (北の方) 昔物語などを見るにも、世の常の心ざ  
し深き親だに、時に移ろひ、人に従へば (3,126,13)
- 49) (乳母) かくあまたの御中に、とりわききこえさ  
せ給につけても (3,215,13)
- 50) (弁) げにをのれらが見たてまつるにも、さなん  
おはします (3,216,9)
- 51) (朱雀院) しか思ひたどるによりなん (3,217,11)
- 52) (源氏) 世の中によしあり、さかしき方<sup>へ</sup>の人  
とて、見るにも、この世にそみたる程の濁り深き  
にやあらむ (3,286,3)
- 53) (源氏) すく<sup>へ</sup>しく、すこしさかしやとや言ふ  
べかりけむ、と思ふには頼もしく、見るにはわず  
らはしかりし人ざまになん (3,351,14)
- 54) (源氏) すく<sup>へ</sup>しく、すこしさかしやとや言ふ  
べかりけむ、と思ふには頼もしく、見るにはわず  
らはしかりし人ざまになん (3,351,15)
- 55) (大宮) この中将の、いとあはれにあやしきまで  
思ひあつかひ、心をさはがいたまふ見はべるにな  
む (3,65,7)
- 56) (源氏) 言ひなやまし給ふになん心や染み給らん  
(3,95,10)
- 57) (夕霧) いま思ふにも、いかでかはさありけむと、  
わが心ながらいにしへだにをもちりけりと思ひ知  
らるゝを (4,145,15)
- 58) (夕霧) 思ふにかなはぬとき、身を投ぐるためし  
もはべなるを (4,148,15)
- 59) (夕霧) この世にはかりそめの御契なりけりと見  
給には、形見といふばかり、とどめきこえ給へる  
人だにものし給はぬこそくちおしう侍れ (4,200,9)
- 60) (大納言) 心ゆくにかかせて、かしづきて見たてま  
つらんに、命延びぬべき宮の御さまなり (4,234,9)
- 61) (大納言) われらが見たてまつるには、いと物まめ  
やかに御心をさめ給ふこそおかしけれ (4,241,12)
- 62) (八宮) 子の道の闇を思やるにも、男はいとしも  
親の心を乱さずやあらむ (4,348,10)
- 63) (中将君) この君の御事をのみなむ、はかなき世の  
中を見るにも、うしろめたくいみじきを (5,128,3)
- 64) (薫) 世中をすべて例の人ならで過ぐしてんとお  
もひはべりしを、かく見たてまつるにつけてひた  
ふるにも捨てがたければ (5,231,4)
- 65) (薫) やむごとなくもの<sup>へ</sup>しき筋に思給へばこ  
そあらめ、見るにははたことなる咎も侍らずな  
どして、心やすくうたしと思ひ給へつる人の  
(5,278,4)
- 66) (右近) その筋よりほかに、何ごとをかと思給へ  
寄るに、耐え侍らずなむ (5,287,12)

【異形】

- 67) (右近) この方の御好みにはもて離れたまはざ  
りけりと思給ふるにも、くちをしく侍わざかな  
(1,141,7)
- 68) (源氏) と思ひ給ふるにもしのびがたう (2,125,9)
- 69) (源氏) おほろけにしおぼるにあまるほどを慰む  
るぞや (2,417,7)
- 70) (朱雀帝) わが世残少なき心地するになむ、いと  
いとおしう (2,97,1)
- 71) (女御) かくの給ひさはぐを、はしたなう思はるゝ  
にも、かたへはかゝやしきにや (3,18,1)
- 72) (朱雀院) 女はおとこに見ゆるにつけてこそ、く  
やしげなる事も、めざましき思ひも、をのづから  
うちまじるわざなめれと (3,217,12)
- 73) (朱雀院) 深き本意も遂げずなりぬべき心ちのす  
るに思もよをされてなん (3,219,6)
- 74) (源氏) 「四十の賀といふことは、さき<sup>へ</sup>を聞き  
「侍」にも、残りの齢久しきためしなん少なかりけ  
るを (3,265,5)
- 75) (内大臣) かたくなしく見ぐるしと見侍につけて  
も (3,73,2)
- 76) (大和守) げにこの方にとりて思給ふるには、  
かならずしもおはすまじき御ありさまなれど  
(4,136,15)
- 77) (明石君) いにしへのためしなどを聞き侍につけ  
ても、心におどろかれ、思ふよりたがふふしあり  
て (4,195,14)
- 78) (大君) けさはまた、聞こゆるに従ひ給へかし  
(4,394,13)
- 79) (夕霧) かたじけなけれど、ものをおぼし知る御  
ありさまなど、晴れ<sup>へ</sup>しき方にも見たてまつり  
なをし給までは、平らかに過ぐし給はむこそたが  
御ためにも頼もしきことにははべらめと、おしは  
かりきこえさするによりなむ (4,93,12)
- 80) (薫) 御前の梢も霞隔てて見え侍るに、あはれな  
ること多くも侍るかな (5,20,6)

- 81) (右近) まゝがこの御いそぎに心を入れてまどひ  
ゐて侍るにつけても、それよりこなたにと聞こ  
えさせ給御ことこそ、いと苦しくいとおしけれ  
(5,245,1)
- 82) (中将君) いましばしながらへ侍れば、なを頼み  
きこえ侍べきにこそと思給ふるにつけても、目の  
前の涙にくれて (5,292,11)
- 83) (妹尼) などか、いと心うく、かばかりいみじく  
思きこゆるに、御心を立てては見え給 (5,338,8)
- 84) (浮舟) 中へ思出るにつけて、うたて侍ればこ  
そ、え聞こえ出ぬ (5,382,6)
- 85) (阿闍梨) この寝殿を御覧ずるにつけて、御心動  
きおはしますらん (5,88,5)

#### 4.2. 助動詞を含まない形容詞準体句

「に」準体法の形容詞の例について、形容詞の意味に  
ついてABCの類型を立てて考察した吉田 (1995) にな  
らい、A情意的 (感情形容詞、評価形容詞)、C属性  
的 (次元形容詞注)、色彩形容詞、その他)、その中間  
的なB (否定形容詞、程度形容詞、感覚形容詞、時間  
形容詞) という三つの類型に分け、更にAの感情・評  
価形容詞の評価の意味について、プラス評価は+、マ  
イナス評価は-という独自の符号を付したのが、次の  
表3である。また、接続助詞「に」のケースについて  
も同様に表3'に示す。

格助詞「に」の場合 (準体法) も接続助詞「に」の  
場合も同様に、A (情意的) とB (中間的) とC (属  
性的) のすべての類型が現れ、かつプラス評価的な意  
味を伴う形容詞もマイナス評価的な意味を伴う形容詞  
もともに現れる。

C (属性的) 形容詞としては、格助詞「に」準体法の  
場合には「深し」が、接続助詞「に」の場合には「多  
し」が現れている。助詞「を」の場合には、格助詞の  
場合も接続助詞の場合も、ともに「深し」「多し」「少  
なし」の3語が共通して現れていたことと比較すると、  
ややバリエーションは少なくなっているが、基本的  
には助詞「を」の場合と同様の傾向を示している  
と見て良いだろう。

Aの情意的形容詞における意味内容のプラス評価か  
マイナス評価かという点では、明確なプラス評価的な  
意味のものとして、格助詞「に」準体法で「かしこし」  
「のどけし」「やむごとなし」「よし」「をかし」、接続  
助詞「に」で「かしこし」「心やすし」「たのもし」が  
現れている。助詞「を」の場合と比較すると、格助詞  
「に」のバリエーションがやや増えているが、これも基  
本的には助詞「を」の場合と同様の傾向を示している  
と言えよう。

連体形終止法では、Cの属性的形容詞は一例も見ら  
れず、Bの中間的な「なし」が3例見られる以外は、す  
べてAの情意的形容詞であり、かつ、Aの情意的形容

表3 「に」準体法形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	8	B	0
かたし (がたし)	2	A	0
あし	1	A	-
あなづらはし	1	A	-
いまめかし	1	A	-
うしろめたなし	1	A	-
おぼつかなし	1	A	-
おもし	1	B	0
かしこし	1	A	+
罪得がまし	1	A	-
くさし	1	B	0
こころぼそし	1	A	-
亡し	1	B	0
なほなほし	1	A	-
のどけし	1	A	+
ふかし	1	C	0
むつかし	1	A	-
やむごとなし	1	A	+
よし	1	A	+
をかし	1	A	+

計28例

表3' 接続助詞「に」形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	12	B	0
かたし (がたし)	6	A	0
さうざうし	5	A	-
うらめし	2	A	-
こころぼそし	2	A	-
なやまし	2	A	-
あし	1	A	-
いたし	1	A	-
いとほし	1	A	+ -
うしろめたし	1	A	-
多し	1	C	0
かしこし	1	A	+
くるし	1	A	-
こころやすし	1	A	+
たのもし	1	A	+
ねたし	1	A	-
はづかし	1	A	-
はえなし	1	A	-
わづらはし	1	A	-
をかし	1	A	+

計43例

詞の評価の意味合いは「良し」1例を除き、すべてマイ  
ナス評価の意味合いを伴うものであった。一方、連体  
法では形容詞の用例の総数が多いこともあって、ABC  
すべての類型が観察され、またプラス評価の意味合い  
を含む形容詞も豊富に見られた。(土岐(2005、2008))  
以上の結果と比較すると、「に」準体法の場合は、土  
岐 (2010) で述べた「が」準体法や土岐 (2011) で述

べた「を」準体法の場合と同様に、連体形終止法よりは、通常の連体法との共通性の高さを示す結果となっている点で興味深い。

また、動詞節に対する形容詞の出現率を見てみると、「に」準体法は33%（動詞節86例、形容詞節28例）、接続助詞「に」では43%（動詞節101例、形容詞節43例）となっている。土岐（2011）の結果では、「を」準体法は27%（動詞節119例、形容詞節33例）、接続助詞「を」では67%（動詞節89例、形容詞節60例）であったので、接続助詞「に」と同「を」とでは傾向差が見られる。

土岐（2009）、土岐（2010）の結果と併せて、それ以外の用法とも比較すると、「が」準体法が29%（動詞節21例、形容詞節6例）、助詞無し準体法は14%（動詞節29例、形容詞節4例）、連体形終止法29%（動詞節62例、形容詞節18例）、連体法113%（動詞節1394例、形容詞節1573例）である。「に」準体法は、「を」準体法や「が」準体法の場合と同様に、連体法よりは連体形終止法との共通性の高さを示していると言えよう。

連体法と終止法の場合については形容詞の総出現数が多いため、分析の便宜上、対象としたのは6例以上出現した形容詞に限定しているが、準体法の場合は形容詞の総出現数が少ないため、現れたすべての形容詞を扱っている。そのため厳密な意味での両者の比較は難しいのであるが、以上の結果から、「に」準体法の形容詞については、「を」準体法の形容詞とほぼ同様に、意味の種類の観点からは連体法に近く、動詞と比較した出現率の観点からは連体形終止法に近いという特徴を示していると言えよう。

以下に「に」準体法形容詞の全用例を示す。

**【同形】**

用例なし。

**【異形】**

- 86) (左馬頭) をかしきにすゝめる方なくてもよかるべしと見えたるに (1,40,3)
- 87) (左馬頭) 時につけつゝさまを変えていまめかしきを目移りて、をかしきもあり (1,44,11)
- 88) (左馬頭) いまめかしく掻い弾きたる爪をと、かどなきにはあらねど (1,52,8)
- 89) (左馬頭) かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ (1,54,2)
- 90) (女) 月ごろ、風病重きに耐えかねて、極熱の草薬を服して (1,58,5)
- 91) (女) いと臭きによりなんえ対面たまはらぬ (1,58,6)
- 92) (源氏) おしげなき身はなきになしても (2,17,8)
- 93) (僧都) いまは、夜居などいと耐へがたうおぼえ侍れど、仰せ言のかしこきにより、古き心ざしを

添えて (2,233,7)

- 94) (源氏) 中ごろ身のなきに沈み侍しほど、かたへに思ひ給へし事は、片はしづつかなひにたり (2,241,10)
- 95) (源氏) 隔たりゆかむほどの行先、いとうしろめたなきによりなむ、思ひ給へをきて侍る (2,281,15)
- 96) (大宮) やむごとなきに譲れる心おきて (2,291,12)
- 97) (明石の入道) いかにして宮この高き人にたてまつらんと思ふ心深きにより (2,68,13)
- 98) (紫上) かねてよりもさやうに思しかど、ついでなきにはつゝましきを (3,257,7)
- 99) (源氏) いかでかゝるにはと、罪得がましきにも、思なほる事もあるべし (3,288,10)
- 100) (太政大臣) 世の中の常なきにより、かくかしこきみかどの君も位を去りたまひぬるに (3,319,1)
- 101) (源氏) 多くの年を知らぬ国に過ごし、身をなきになして、この琴をまねび取らむとまどひてだに (3,343,15)
- 102) (柏木) いと捨てがたきによりてこそかくまでも侍れ (3,365,11)
- 103) (六条御息所) いまはたゞ亡きにおほしゆるして、こと人の言ひおとしめむをだに、はぶき隠し給へとこそ思へ (3,372,7)
- 104) (源氏) 言ふかひなきにゆるし捨てたまふこともやと聞きはべりて (3,66,5)
- 105) (内大臣) さぶらはではあしかりぬべかりけるを、召しなきに憚りて (3,71,8)
- 106) (源氏) またまことに弾き得ることはかたきにあらん (3,9,8)
- 107) (夕霧) 猶かの緑の袖のなごり、あなづらはしきにことつけて、もてなしたてまつらむと (4,113,8)
- 108) (大納言) 琵琶は、押手しづやかなるさまをよきにする物なるに、柱さすほど、撥をとのさま変はりて (4,237,6)
- 109) (八宮) かゝる対面も、このたびや限りならむと、もの心ほそきに忍びかねて (4,349,11)
- 110) (浮舟) 心ちのあしく侍るにも、見たてまつらぬがいとをぼつかなくおほえ侍るを (5,236,10)
- 111) (中将) さやうのこのおぼつかなきになん、憚るべきことには侍らねど、なを隔てある心ちし侍りき (5,376,4)
- 112) (紀伊守) まかり上りて日此になり侍ぬるを、公事のいとしげく、むつかしうのみ侍るに、かゝづらひてなん (5,379,2)
- 113) (妹尼) 身にはかゝる世の常の色あひなど、久しく忘れにければ、なをへしく侍につけても、昔の人あらましかばなど思出侍る (5,382,1)

**4.3. 助動詞を含む準体句**

受け身と自発の(ラ)ル、使役の(サ)スなど、待遇



表現以外の助動詞が現れる場合について総数が多い順にまとめたのが次の表4である。また、接続助詞「を」後接例についても同様に、表4'として次に示す。

助動詞が現れる場合、節述語の中心となる品詞は動詞、形容詞、名詞と多岐に渡り、また、複数の助動詞が相互に接続するケースも多いが、述語の中心的品詞の種別は問わず、また、複数の助動詞が現れる場合は最句末のもののみを取り上げる。

ナリの場合、終止・連体同形の活用語につくナリは対象から除外した。以下に示した終止ナリと連体ナリは終止・連体異形の活用語につくものである。また、非活用語につくナリを以下では体言ナリとしてある。

また、助動詞自体の活用が終止・連体同形のもののは網掛けで示してある。

表4 「に」準体法助動詞総数順

形式	総数
ム	84
キ	20
メリ	6
体言ナリ	5
ケリ	5
ベシ	5
リ	5
タリ	4
ラル	4
連体ナリ	3
ズ	3
ツ	2
ヌ	2
ス	1
マジ	1

計150例

表4' 接続助詞「に」助動詞総数順

形式	総数
キ	63
ツ	21
ム	21
ズ	12
タリ	10
メリ	10
ケリ	7
リ	7
体言ナリ	3
ベシ	3
連体ナリ	2
ヌ	2
ラム	1
ケム	1
ラル	1
ル	1
マホシ	1

計166例

「に」準体法(表4)では、推量のムが150例中、84例と優に半数を超え、抜きん出て多い。一方、接続助詞「に」(表4')では、過去のキが166例中、63例とやはり抜きん出て多い。

助詞「を」の場合は、「を」準体法と接続助詞「を」とで分布の際だった傾向差は認められなかった。(土岐(2011))両者とも抜きん出て多かったのが過去の助動詞のキであり、それぞれ総計338例中96例(28.4%)、総計322例中82例(25.5%)と、助動詞全体においてかなりの比率を占め、次に「を」準体法は推量のムが、接続助詞「を」は推量のメリが続くが、それぞれ第一位のキの半数にも満たず、以下、過去・完了系のケリ、ツ、リ、ヌ、タリ類と、推量系のメリ、ベシが、否定のズを中程にはさんで入り交じりつつ上位に現れ、次に断定の体言ナリが続いていた。

それに対して助詞「に」の場合は準体法か接続助詞かで最上位に現れる助動詞に明確な違いが見られ、構文的な格関係の有無が、助動詞の分布により影響を与えているようである。結果として、「に」準体法の分布は、「を」準体法よりも、土岐(2010)で示した「が」準体法に類似していると言えよう。

ただこの点については、助詞「を」の格助詞としての判定が助詞「に」よりも困難であったため、構文の認定の揺れが影響している可能性も否定出来ない。

## 5. おわりに

本稿での分析結果を以下にまとめる。

古代日本語会話文中の「に」準体句のデータを分析した結果、以下のような特徴が観察された。

1. 助動詞を含まない動詞準体句の場合、現れる動詞の意味タイプは、
  - 1 感情・思考・知覚動詞
  - 2 動作・変化動詞
  - 3 存在詞
 の順に多い。
2. 助動詞を含まない形容詞準体句の場合、形容詞の意味類型は
  - A 情緒的
  - B 中間的
  - C 属性的形容詞
 のすべてが現れる。
 

また、評価的意味を有する形容詞の場合、プラス評価の意味合いを持つものと、マイナス評価の意味合いをもつものとがともに現れる。
3. 助動詞を含む準体句の場合、推量のムが特に際だって多い。

1については、「が」準体法の分布傾向と比較して、動作・変化動詞が多い連体法との類似度が下がり、感情・思考・知覚動詞が多いことが特徴である連体形終



止との共通性が増している。この傾向は「を」準体法の場合と比較しても更に顕著である。

2については、「が」準体法や「を」準体法の分布傾向とはほぼ同様に、意味の種類の観点からは連体法との共通性の高さを示す結果となっており、動詞と比較した出現率の観点からは連体形終止法との共通性の高さを示している。

3については、「を」準体法よりも「が」準体法に近い分布であるが、過去・完了系の助動詞が上位を占めるものの推量系の助動詞も上位に現れる「が」準体法よりも、更に第一位のムが全体に占める割合が顕著に多くなっている。この点のみ、「が」や「を」の場合と比較した場合の連体形終止法の分布傾向との類似性がやや低くなっている。

今後も引き続き、他の助詞が後接する場合の準体法の分析を進め、それらの結果も併せて準体法の位置について考察していく必要がある。

## 注

吉田 (1995) によると、

せばし、たかし、ちかし、とほし、ふかし、みじかし、ひろし、ほそし、ちひさし

が例示されている。

- 同 (2010) 「平安和文会話文における準体句—助詞「が」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』59、15-23
- 同 (2011) 「平安和文会話文における準体句—助詞「を」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』60、(23-33)
- 山内洋一郎 (1959) 「院政期の連体形終止」『国文学攷』21、240-250、広島大学国語国文学会
- 同 (1963) 「奈良時代の連体形終止」『国文学攷』30、33-41、広島大学国語国文学会
- 同 (1964) 「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」『広島大学文学部紀要』23-3、125-152
- 同 (1970) 「下二段「たまふ」の終止法—連体形終止の観点から—」『国文学攷』54、55-58、広島大学国語国文学会
- 同 (1992) 「平安時代の連体形終止」井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開』25-44、和泉書院
- 同 (1997) 「助動詞「うず」の連体形終止について—中世における終止形の残存—」『文教国文学』37、1-8
- 同 (2003) 『活用と活用形の通時的的研究』清文堂出版
- 吉田光浩 (1995) 「平安期形容詞の意味と終止用法について—「枕草子」『源氏物語』『栄花物語』を資料として—」宮地裕・敦子先生古希記念論集刊行会編『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』112-145、明治書院

(2011年8月2日受理)

## 主要参考文献

- 尾上圭介 (1982) 「文の基本構成・史的展開」森岡健二他編『講座日本語学2 文法史』明治書院1-19
- 同 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版
- 小池清治 (1967) 「連体形終止法の表現効果—今昔物語集・源氏物語を中心に—」『国文学 言語と文芸』54、12-21
- 近藤泰弘 (1986) 「〈結び〉の用言の構文的性格」『日本語学』5-2、22-30
- 同 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 同 (2001) 「名詞節と項構造」『日本語文法』1-1、41-52
- 信太知子 (1970) 「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』82、29-41
- 同 (1987) 「『天草本平家物語』における連体形準体法について—「覚一本」との比較を中心に消滅過程の検討など—」『近代語研究』7、121-139、武蔵野書院
- 同 (1996) 「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を中心に句相互の関連性について—」『神女大國文』7、172-189
- 同 (2006) 「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」—句構造の観点から—」『神女大國文』17、29-44
- 土岐留美江 (2005) 「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1-4、16-31
- 同 (2008) 「平安和文会話文における連体修飾連体形と連体形終止連体形の比較分析」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』57、55-62
- 同 (2009) 「平安和文会話文における準体句—助詞が後接しない場合—」『愛知教育大学研究報告 (人文・社会科学編)』58、31-39